Tonyuquq 碑文に見える bögü-, bügü-qaγan について

護　雅夫

一

いわゆる Tonyuquq（暾欲谷）碑文――あとで翻訳する――には、bögqγn または bügqγn（第三四行、第一碑文北面）[1]、bgüqγn（第五〇行、第二碑文南面）[2]の語が見える。

トムセン（Thomsen, V.）は、これらを、それぞれ、bög-qaγan, bögü-qaγan と写し、前者を bögü-qaγan の誤記または誤刻と考えて、ともに、中国史料に、黙啜（Qapγan-qaγan）の子供としてあらわれる匐俱にあたるものとし[3]、このトムセン説が、その後、通説となってきた[4]。

しかし、岑仲勉は、この通説を否定して、第三四行、第五〇行の bög(ü)-qaγan を、いずれも黙啜（Qapγan-qaγan）の別称とみなした[5]。これにつづいて、ジロー（Giraud, R.）は、これらは両者ともに bög-qaγan と写さるべきで、bög は、「賢い、ずるい」などを意味する形容語であると考え[6]、第三四行の bög-qaγan を黙啜（Qapγan-qaγan）に[7]、第五〇行のそれを骨咄禄（骨吐禄、骨篤禄、Qutluγ. Iltiriš-qaγan）に[8]、それぞれ比定した。

この、岑仲勉、ジローの両説が出てからも、クリャシトルヌィ（KLYAŠTORNYJ, S.G.）、グミリョフ（GUMILEV, L.N.）は、依然、トムセン以来の通説をとっている。(9)

わたしは、まず、問題の語は、第三四行では bög-qaγan または büg-qaγan と、第五〇行では bögü-qaγan あるいは bügü-qaγan と写さるべきで、第三四行の bög ないし büg のつぎに ü をしめす文字が脱落していると考える。註（13）でも触れるように、そのすぐ前の第三三行の sabïγ が sab の誤りであることだけからもわかるように、この碑文に誤記、誤刻がまったくないとは言えぬからでもある。この点では、わたしは、これらをおなじく bög-qaγan と読んだジローの説に反対し、トムセンの意見に賛成する。

つぎに、わたしは、この bögü-qaγan（または bügü-qaγan）を、中国史料の匐俱にあてる、トムセンにはじまる通説は誤りであると考える。この問題についてはすでに一文(10)を草したので、ここでは触れず、いまはただ、それを誤りとする理由が、突厥碑文にあらわれる可汗号がほとんどすべて正式の可汗号であるのにたいし、匐俱とは黙啜（Qapγan-qaγan）の子供の本名（または異名）であって、その正式の可汗号は「小可汗」「拓西可汗」であり、したがつて、中国史料にも匐俱可汗などという称号が見えぬ、という点にあることだけをのべるにとどめる。

それでは、bögü-, bügü-qaγan とは、いつたい誰を指したものなのか。

二

そこで、この可汗の称号が最初にあらわれる Tonyuquq 碑文第三四行（第一碑文北面）の前後数行を、まず、

翻訳しておく。[11]

(29) qürqüz〔黠戛斯〕から我々は還った。türgiš〔突騎施〕の qaγan から斥候が（もどって）来た。その言葉はこの〔つぎの〕よう（であった）。「(türgiš の qaγan は)『東方の qaγan にむかって、軍隊（とともに）我々は進もう』と言ったという。『進まなければ、我々を、――その qaγan は勇敢であるという、その顧問は賢明であるという――もし包囲するならば、

(30) 我々を、彼らはまさしく殺す〔滅ぼす〕であろう』と、彼〔türgiš の qaγan〕は言ったという。türgiš の qaγan は出発〔出軍〕したらしい」と、彼〔斥候〕は言った。「十箭〔十姓、西突厥〕の民は残りなく出発〔出軍〕したらしい」と、彼〔斥候〕は言う。tabγač〔唐〕の軍隊がいるという。その言葉を聞いて、我が qaγan は、「自分は、家〔本営〕にむかって下馬しよう〔還ろう〕」と言った。

(31) qatun が殁(な)くなっていた。[12]「彼女を、自分は葬らせよう」と、彼〔我が qaγan〕は言った。「軍隊よ、汝たち行け」と、彼は言った。「金山で、汝たち駐屯せよ」と、彼は言った。「軍隊の長官（として）、inäl-qaγan（また は inil-qaγan）と tardušsad とが行くように」と、彼は言った。賢明な tonyuquq に、私に、彼は（つぎのように）命令した。

(32) 「この軍隊を進めよ」と、彼は言った。「刑罰を、汝の意のままに命令せよ。自分は、汝に、何を命令しようか！」と、彼は言った。「(敵軍が) 来つつあるならば、よく監視せよ。彼らは集合する。来ないでいるならば、情報を取りつづけよ」と、彼は言った。金山で、我々は駐屯した。

(33) 三人の斥候の者が（もどつて）来た。彼らの言葉は同一（であつた）。「その〔türgiš の〕qaγan は、軍隊（とともに）出発した。十箭の軍隊は残りなく出発した」と、彼ら〔斥候〕は言う。（türgiš の qaγan は）「yariš 平原で、我々は集結しよう」と、言つたという。その言葉を聞いて、（我が）qaγan にむけて、その言葉を、私は送つた〔伝えた〕。（我が）qan から、言葉が[13]、もどつて

(34) 来た。「汝たち駐屯せよ」と、彼は言つたという。「馬駈けるな。監視所を良く建てよ。襲わせるな」と、彼は言つたという。bög(ü)-qaγan（または büg(ü)-qaγan）は、私にむかつては、この〔上の〕ように命令し送つた〔伝えた〕という。（しかし）、apa-tarqan[14] にむかつては、内密の言葉〔密令〕を、彼は送つた〔伝えた〕という。（すなわち）「賢明な tonyuquq は悪い。彼は自身〔自主的?〕である。彼は理解する〔利口である〕。

(35) 『軍隊（とともに）我々は進もう』と、彼は言うだろう。汝たちは（彼に）同意するな」と。その言葉を聞いて、軍隊を、私は進ませた。

ジローは、この Türgiš 遠征は、六九七年と六九九年との間、多分、六九八年に行なわれたと思われる、と言つているが[15]、これは誤りである[16]。この戦闘が、黙矩（黙棘連）、のちの Bilgä-qaγan（毗伽可汗）の二七歳のとき、つまり七一〇年に行なわれたものであることは、岩佐精一郎氏の説かれた通りである[17]。

ところで、通典巻一九八突厥中には、

（聖暦）二年、黙啜立其弟咄悉匐為左廂察、骨咄祿子黙矩為右廂察、各主兵馬二万余人。又立其子匐俱為小可汗、位在両察之上、仍主処木昆等十姓兵馬四万余人、又号為拓西可汗[18]。

とあつて、骨咄禄の子供默矩が右廂察（Tardušˇšad）[19]になり、默啜の子供匐俱が小可汗、拓西可汗に立てられたのは聖暦二年（六九九）であることが伝えられている。ところが、Köl-tigin（闕特勒）、Bilgä-qaγan（毗伽可汗）両碑文によれば、默矩が Turduš-šad になつたのはその一四歳のとき[20]であるというから、これが正しいとすると、それは神功元年（六九七）のことでなければならない。この、中国・突厥両史料間の相違が、岩佐氏の断言されるように、「唐人が塞外の事情に疎かりしを証するだけ[21]」のものなのか、それとも、默啜（Qapγan-qaγan）が、その子供匐俱を拓西可汗に立てて、西方拓境の意志を固めたのが聖暦二年で、中国史料が、默矩の右廂察（Tardušˇšad）就任を、この年にまとめてしるしたにすぎないのか、いずれとも確言しかねる。しかし、とにかく、默矩（默棘連）が、神功元年（六九七）から、開元四年（七一六）に即位して Bilgä-qaγan となるまでのあいだ、Tardušˇšad（右廂察、右賢王）[22]であつたことは、たしか[23]である。

さて、さきに翻訳しておいた Tonyuquq 碑文の数行をとりあげると、まず問題になるのは、Qïrqïz 遠征から還つて、Türgiš の qaγan 来襲の報を聞き、qatun の葬儀をおそらく口実にして[24]本営にもどり、軍隊に金山（アルタイ山脈）で駐屯するよう命じた「我が qaγan」が誰であるか、である。トムセンは、これは、大可汗たる Qapγan-qaγan（默啜）であるよりもむしろ、その子供 Bögü-qaγan（匐俱可汗）であつたのかも知れないと若干疑いをのこした[25]。ところが、クリャシトルヌィは、さらに一歩を進めて、「Bögü-qaγan は、先に敵を攻撃する危険をおかさなかつた。Bögü は、軍隊を Altun の密林にのこして、そこで Türgiš の攻撃を待ちもうけるよう命じ、自分はおのれの本営へ還つた[26]」といい、問題の「我が qaγan」は Bögü-qaγan（匐俱可汗）であると断言するにいたつ

た。たしかに、当時、匐俱は拓西可汗ではあつたが、前稿でのべ、本稿の冒頭でふたたびしるしておいたように、Bögü-qaγan（匐俱可汗）という称号を帯びた qaγan が存在しなかつた以上、かれの説は誤つている。この「我が qaγan」とは、やはり、岑仲勉、ジロー、グミリョフなどが指摘している通り、当時の大可汗 Qapγan-qaγan（默啜）でなければならない。(27)

このQapγan-qaγanは、本営にもどるにさいし、「軍隊の長官として、inäl-qaγan（または inil-qaγan）と tarduš-šad とが行くように」と命じているが（第三一行）、ここにいわゆる Tarduš-šad が、さきにのべた、神功元年（六九七）以来、その地位、つまり右廂察の位にあつた默矩（默棘連、のちの Bilgä-qaγan）であることはいうまでもない。わたしが旧稿で指摘したように、左廂察（左察、Tölis-šad）が東突厥国家の東半を支配したのにたいし、右廂察（右察、Tarduš-šad）がその西半の支配にあたつていたとすれば、(28) 西方、Türgiš 遠征軍の指揮を分担していたのが、その Tarduš-šad の任にある默矩であつたのは当然である。そして、この Türgiš との戦闘に、Tarduš-šad（默矩）がじつさいに参戦していたことは、Tonyuquq 碑文第四一行（第二碑文南面）と、Bilgä-qaγan 碑文東面第二七行—第二八行に見えるところによつて明らかである。

それでは、前掲 Tonyuquq 碑文第三一行にいうように、Qapγan-qaγan から、このTarduš-šad とともに Türgiš 遠征をまかせられた Inäl, Inil-qaγan とは何者であるか。

かれが、旧唐書巻一九四上突厥伝上そのほかに、

默啜既老、部落漸多逃散、開元二年、遣其子移涅可汗及同俄特勒・妹婿火拔頡利発石阿失畢、率精騎囲逼北

庭。[29]

などと見える移涅可汗であることは、一般に認められているところで、これには何の疑いもない。[30]

しかし、問題はただこれだけでは解決しない。というのは、前にのべた匐俱とこのInäl-, Inil-qaγan（移涅可汗）との関係である。

まず、トムセンは、かれのいわゆるBögü-qaγan（匐俱可汗）とInäl-, Inil-qaγan（移涅可汗）とは、Qapγan-qaγan（黙啜）の子供——前者は長男、後者は次男——で、ともに、父の在世中に可汗号を授けられていた、[31]といい、クリャシトルヌィは、これにしたがつて、Bögü-qaγan（匐俱可汗）はQapγan-qaγan（黙啜）の長子、Inäl-, Inil-qaγan（移涅可汗）はその次子である、というのみならず、さらに進んで、前掲Tonyuquq碑文第三四行に見えるApa-tarqanはこのInäl-, Inil-qaγanであると断言するにいたつた。[32]これらにたいして、岑仲勉は、匐俱とInäl-, Inil-qaγanとを同一人物と考えたが、その詳しい理由はあげていない。[33]

まず、匐俱についていえば、さきに引用した史料が語るように、かれは黙啜（Qapγan-qaγan）の子供で、小可汗として左廂察（左察、Töliš-šad）咄悉匐と右廂察（右察、Tardušˇ-šad）黙矩との上に立ち、「処木昆等十姓兵馬四万余人」を支配して、拓西可汗の称号を授けられた。前にのべたように、Tardušˇ-šadは東突厥国家の西半を統治していたが、これとTöliš-šadとの上に、拓西可汗として匐俱が任命されたのである。しかし、匐俱が直接支配したのが「処木昆等十姓兵馬四万余人」であり、その可汗号が拓西可汗であるのから考えて、かれの主要な任務が、西方遠征軍の指揮にあつたことは疑いない。

(A) そうだとすると、黙啜（Qapγan-qaγan）は、わが子匐俱を小可汗、拓西可汗に任命して以後、その西方拓境を、主として、この拓西可汗匐俱と、国家の西半を支配する右廂察（右察、Tardušsad）黙矩とに委任することになつたと考えられる。

(B) ところが、他方、まえに翻訳しておいた Tonyuquq 碑文第三一行に見えるごとく、Qapγan-qaγan が本営に還るにあたつて、かれが「軍隊の長官」として後事を託したのは、ほかならぬ「inäl-qaγan（または inil-qaγan）と tardušsad と」であつた。

いま、この(A)と(B)とを考えあわせると、われわれは、(A)における拓西可汗匐俱こそ、(B)に見える Inäl-, Inil-qaγan ではないか、という推定にみちびかれざるをえないであろう。そののち行なわれた東突厥軍のソグディアナ遠征に、Inäl-, Inil-qaγan が Tonyuquq とともに参加しているのも（Tonyuquq 碑文第四五行、第二碑文南面）、また、さきに引用した史料がしめす通り、開元二年（七一四）、移涅可汗（Inäl-, Inil-qaγan）が同俄特勒（Toγa-tigin）[34] そのほかとともに、北庭（Bišbalïq）を攻撃しているのも、かれが拓西可汗であつたればこそであろう。

わたしは、このような理由から、匐俱を本名（または異名）とする小可汗の、突厥語の可汗号が Inäl-, Inil-qaγan（移涅可汗）で、それの中国語訳が拓西可汗であると考える。

inäl, inil の語源については定説がない。inal はチャガタイ文語（Dschagataische Schriftsprache）では「君主、qan」をしめし[35]、また、inal は古代チュルク語では「高官の称号」を意味するが[36]、inäl, inil は、これらの口蓋化したものと考えられなくもない[37]。しかし、マフムード＝アルカーシュガリー（Maḥmūd al-Kāšγarī）によると、in-

には「降りる、降る、(洪水などが)襲う」などの意味があり、[38] 古代チュルク語でも、in- は「降りる」をしめし、[39] また、カザン方言(Kasaner-Dialect)、サガ方言(Sagaischer Dialect)、トボル方言(Tobol-Dialect)、コイバル方言(Koibalischer Dialect)、クズル方言(Kysyl-Dialect)、バラバ方言(Baraba-Dialect)、さらにオスマン語では、in- は än- とともに、「降りる、下る」をあらわす。[40] inäl, inil は、これらに、Deverbales Nomen 語尾 -ºl が付された名詞-形容詞で、「降りるところの(もの)」をあらわすのではなかろうか。突厥でも、匈奴そのほかの北アジア遊牧民族におけるように、東が西よりも尊ばれたから、拓西可汗つまり「西にむかつて拓境する可汗」が、「降りる可汗、下る可汗」と呼ばれたのかも知れぬ。西方、石国(Taškent)の傍の一城の城主が伊涅達干(Inäl-, Inil-tarqan)と称されていたのも、このさいひとつの参考にはなろう。

しかし、さらに検索すると、カザン方言では、in-, än- は「入る、押し入る、侵入する」をしめし、[41] キルギス方言(Kirgisischer Dialect)では、en-, än- は「踏みこむ、入る」を意味する。[42] inäl, inil は、これらから派生した名詞-形容詞で、「侵入するところの(もの)」、したがつて、Inäl-, Inil-qaγan とは、西方へ「侵入する可汗」をあらわすとも考えられなくはない。ともに仮説として提出しておく。

その語源についてはともかく、わたしは、Inäl-, Inil-qaγan(移涅可汗)と拓西可汗匐俱とは同一人物であると考える。この意味で、わたしは、結論的には、岑仲勉の意見に賛成する。

三

それでは、Tonyuquq 碑文第三四行に見える bögü-, bügü-qaγan とは誰を指すのか。

さて、まえに翻訳した Tonyuquq 碑文によると、Tonyuquq は、かれのいわゆる「我が qaγan」つまり Qapγan-qaγan（黙啜）の命令にしたがつて、アルタイ山脈に駐屯し、敵軍の監視と情報の蒐集とにあたつていた。そのとき斥候が帰つてきて、Türgiš の qaγan、西突厥軍がすでに出軍し、Yariš 平原に集結しようとしていることを報告したので、Tonyuquq は、この情報を「（我が）qaγan にむけて」伝えた。すると、これに答えて、「（我が）qan〔qaγan〕[43] から」Tonyuquq に、駐屯して警戒を厳にせよ、という命令がもどつてきたという。この命令について、Tonyuquq は、碑文第三四行で、「bögü-qaγan（または bügü-qaγan）は、私にむかつては、この〔上の〕ように命令し送つた〔伝えた〕という」としるしている。そうだとすれば、Tonyuquq が斥候から得た情報を伝えた「（我が）qaγan」も、Tonyuquq に、アルタイ山脈に駐屯して敵軍の監視と情報の蒐集とにあたるよう命じた「我が qaγan」も、すべて、bögü-, bügü-qaγan であるということにならざるをえない。ところが、前節で指摘したように、ここでいわゆる「我が qaγan」とは Qapγan-qaγan（黙啜）その人にほかならない。要するに、ここでは、Qapγan-qaγan（黙啜）は bögü-, bügü-qaγan と呼ばれているのである。逆にいえば、ここに見える bögü-, bügü-qaγan は、Qapγan-qaγan（黙啜）以外の誰でもないと考うべきである。

そして、この考えには、また別の根拠がある。それはほかでもない、Tonyuquq 碑文第五〇行（第二碑文南面）

に見えるつぎの一節である。

彼らの顧問も私であつた。(すなわち)、Iltiriš-qaγan にたいする、türük[44] の bögü-qaγan (または bügü-qaγan) にたいする、türük の bilgä-qaγan にたいする。

問題は、ここに列挙されている三つの可汗号である。

まず、トムセンが、bögü-qaγan をいわゆる匐俱可汗に、bilgä-qaγan を毗伽可汗に比定してから、これが通説となり、これらは、順に、Iltiriš-qaγan (骨咄禄)、Bögü-qaγan (匐俱可汗)、Bilgä-qaγan (毗伽可汗。默矩、默棘連) をならべたものと考えられてきた。ところが、そののち、岑仲勉は、bögü-qaγan を Qapγan-qaγan (默啜) の別称と見なし、上掲の三可汗号は、それぞれ、Iltiriš-qaγan, Qapγan-qaγan, Bilgä-qaγan にあたるものとした。[45] ついで、ジローは、これらの三可汗号は、いずれも、骨咄禄つまり Iltiriš-qaγan に冠せられたものであると考えた。[46] これらにたいして、クリャシトルヌィは、おそらくトムセン[47]にしたがつて、Qapγan-qaγan の死が知れると、その子供匐俱は、多分、みずから「大可汗」と称したのだろうと言い、うえの三可汗のうち bögü-qaγan はこの匐俱可汗を指すと断言した。[48] しかし、クリャシトルヌィ自身も認めているように、「匐俱のこの行動 (「大可汗」と自称したこと—護) を直接しめす証拠は、諸史料には存在しない」[49]のである。

わたしは、さきに翻訳した Tonyuquq 碑文第五〇行において、Tonyuquq は、いわゆる突厥第二帝国の建設以来あいついで立つた三人の可汗、すなわち Iltiriš-qaγan (骨咄禄)、Qapγan-qaγan (默啜)、Bilgä-qaγan (毗伽可汗。默矩、默棘連) を順番にあげ、自分がこの三可汗に顧問としてつぎつぎに仕えたことをのべているのである、

と考える。そうだとすれば、ここでもまた、Qapran-qaran（默啜）がbögü-, bügü-qaranとしてあらわされていることになる。わたしがさきに、Tonyuquq碑文第三四行のbögü-, bügü-qaranがQapran-qaran（默啜）を指すことを裏づける別の根拠がある、といつたのはこのことである。

要するに、わたしは、Tonyuquq碑文第三四行、第五〇行に見えるbögü-, bügü-qaranはともにQapran-qaran（默啜）にほかならぬと考え、この点で、結論としては、岑仲勉の説くところが正しいと思う。

四

それならば、bögü-, bügü-qaranとは、岑仲勉の言うごとくQapran-qaran（默啜）の別称なのであるか。

ジローは、オルクン（ORKUN, H.N.）にしたがつて、bögは「賢い、ずるい」などを意味する形容詞と考えた。[50]しかし、オルクンは、マフムード＝アルカーシュガリーのDivanü Lûgat-it-Türkに拠つて、bögiの語が「学識のある、賢明な、慎重な、智慧のある」などをしめすと記しているのであつて、[51]わたしの知るかぎり、bögにそのような意味はない。

そこでまず、オルクンが根拠としたDivanü Lûgat-it-Türkであるが、それには、

そして、また、賢明（利口）な人がbügü bilgeと呼ばれる。[52]

bükü: 学者、賢明（利口）な、学識のある。bilgeの語とともに使われて、bükü bilgeといわれる。[53]

などとある。ここにbügü, bükü と写されている語が、bögüとも読みうることはいうまでもない。[54]

そのほか、古代チュルク語では、bügü, bögü (?) は「賢明な、呪術に通じた」[55]をしめし、bögü は「呪文、呪術」をあらわし[56]、コマン方言 (Komanischer Dialect) では、bügü, bögü, pägü は「賢者、預言者」を意味する[57]。チャガタイ文語で「呪術」をしめす bügi, büi,[58] オスマン語でおなじく「呪術」をあらわす büi[59]も、これらと関連する語にちがいない。

このように見てくると、Tonyuquq 碑文第三四行、第五〇行の bögü, bügü は「賢い、利口な」、あるいはむしろ、「ずるい、狡猾な、(呪術者のように) 悪賢い」を意味すると考えられる。要するに、わたしは、bögü, bügü は、岑仲勉の言うように Qapran-qaran (黙啜) の別称ではなく、かれの「ずるい、狡猾な、悪賢い」ことをしめすために、Tonyuquq が用いた形容語であると思うのである。

ここで、Tonyuquq が Qapran-qaran (黙啜) を、このように「ずるい、狡猾な、悪賢い可汗」などと呼んだ理由が問題になる。この問題にたいするひとつの解答は、はじめに翻訳しておいた Tonyuquq 碑文の文章のなかに用意されている。それによると、Qapran-qaran (黙啜) は、本営に還るにさいして、Tonyuquq に、「刑罰を、汝の意のままに命令せよ」などと言い、さらに、アルタイ山脈に駐屯して警戒を厳にするとともに情報の蒐集にあたるよう命じておきながら、他方、「apa-tarqan にむかっては、内密の言葉〔密令〕」を発し、「賢明な Tonyuquq は悪い。彼は自身〔自主的?〕である。彼は理解する〔利口である〕。『軍隊 (とともに) 我々は進もう』と、彼は言うだろう。汝たちは (彼に) 同意するな」と伝えたという。Qapran-qaran (黙啜) が Apa-tarqan にこのような密令を出したことを察知した Tonyuquq が、この、自分にたいしていわば不信感をもつ Qapran-qaran を指して、

bögü-, bügü-qaγan、つまり「ずるい、狡猾な、悪賢い可汗」と称したとしても、けつして不思議ではないであろう。[60]

五

しかし、わたしは、Tonyuquq が Qapγan-qaγan（黙啜）にこのような非難の語を浴せた理由は、もつと深いところにあつたと思う。

さて、Tonyuquq は、骨咄禄（Qutlur）をたすけ、唐の羈縻支配から突厥を独立させて、突厥第二帝国の建設に功績をたてただけでなく、その言うところによれば、骨咄禄を可汗に擁立して Iltiriš-qaγan とした、いわゆる kingmaker[62] であつた。かれは、この Iltiriš-qaγan（骨咄禄）の「智慧のとも、栄光のとも」[63] 顧問、参謀、軍司令官として、かれに忠誠をささげた。Tonyuquq が、おのれの娘婆匐を、Iltiriš-qaγan の子供黙矩（黙棘連、のちの毗伽可汗）に嫁したのも、両者のこのように密接な関係をぬきにしては考えられぬであろう。さきにのべた Tonyuquq などの Türgiš 遠征のさいには、黙矩は二七歳であつたから、Tonyuquq は、このときすでに黙矩の舅であつたと見て誤りあるまい。

ところが、通典突厥中に、

骨咄禄、天授中卒。黙啜者、骨咄禄之弟也。骨咄禄死時、其子尚幼、遂簒其位、自立為可汗。[64]

とあるように、骨咄禄（Iltiriš-qaγan）が歿すると、その弟黙啜は、兄の子供たち、黙矩（黙棘連）および闕特勒

(Köl-tigin) が幼少なため[65]、これらをしりぞけて「ついにその位を簒い、自ら立って可汗と為」り、Qapran-qaran と号した。そののち、Qapran-qaran (黙啜) は、さきにものべたように、兄の子供黙矩を右廂察 (右察、Tardušad)、自分の弟咄悉匐を左廂察 (左察、Tölis-šad) としたものの、わが子匐俱を小可汗、拓西可汗つまり Inäl-Inil-qaran (移涅可汗) として、これら両廂察の上にすえた。すなわち、Qapran-qaran (黙啜) は、その治世において、兄 Iltiriš-qaran (骨咄禄) の直系一族をしりぞけて、自己の一門による支配体制を固めようとしたものと思われる。

このような、Qapran-qaran (黙啜) の直系一族による支配体制確立への志向にたいして、突厥の復興・独立、第二帝国の建設以来、Iltiriš-qaran (骨咄禄) に忠誠をつくし、その子供黙矩に自分の娘を嫁していた Tonyuquq が、内心、快からず思っていたであろうことは、これを推察するに難くない。他方、Qapran-qaran (黙啜) は、Tonyuquq の「賢明な (bilgä)」顧問、参謀、軍司令官としての才能を認め、かれを各民族、各地への遠征に用いざるをえなかった。しかし、Qapran-qaran (黙啜) が自己の一門による支配体制を確立しようとするならば、かれにとっては、兄 Iltiriš-qaran (骨咄禄) の重臣でその姻戚にあたる Tonyuquq は、それが賢明で、すぐれた顧問、参謀、軍司令官であるだけにかえって、煙たい存在であったに違いない。Qapran-qaran (黙啜) の、Tonyuquq にたいするこういう感情がまえに引用した Apa-tarqan への密令となってあらわれ、その密令が Tonyuquq を憤慨させたのだと思われる。すなわち、Tonyuquq にとっては、Qapran-qaran (黙啜) は、Iltiriš-qaran (骨咄禄) 一門を排除しようとした点において、その結果、Türgiš 遠征にさいして自分に不信の態度をとつ

た点において、bögü-, bügü-qaγan、「ずるい、狡猾な、悪賢い可汗」であったのである。要するに、Tonyuquq が Qapγan-qaγan（黙啜）をうえのように称した根本的理由は、Iltiriš-qaγan（骨咄禄）一門と、その弟 Qapγan-qaγan（黙啜）一門とのあいだの対立にあったと考えられるのである。一般に、Tonyuquq は Qapγan-qaγan（黙啜）の治世の末期に左遷されたといわれ、わたしもそれは正しいと思う。ジローは、その理由は不明であるとしているが[66]、そのひとつの、しかしもっとも大きい原因は、上述の点にあったと考えて誤りなかろう。

六

前節でのべたことは、Tonyuquq 碑文の第五一行以下、碑文の末尾第六二行にいたる文章（第二碑文東面・北面）からもうかがわれる。この部分は、これより前、とくに第四八行前半にいたるまでが編年的な歴史叙述であるのにたいして、碑文全体のいわば結語にあたり、突厥文字の記述法などにも特殊性が認められる。第五〇行まで（第一碑文西面・南面・東面・北面、第二碑文西面・南面）にまったく見えない Qapγan-qaγan という称号が、ここにいたってはじめてあらわれるのは、そのためであろう。いま、その結語の部分を翻訳するとつぎのごとくである。

第二碑文東面

(51) qapγan-qaγan は二七歳のとき（欠文）。qapγan-qaγan が即位した。夜眠らずに、

(52) 昼休まずに[67]、赤い我が血を尽して、黒い我が汗を流して（または臭わせて?）、労力を、私は捧げたのだ。私

自身、長い騎行〔遠征軍〕をも派遣した。

(53) 連絡せる（?）監視所を、私は大きく〔多く〕した。襲われた敵を、私はよく連れてきたものだつた。我が qaγan とともに、私は軍隊を出軍させた。天が命じたために、

(54) この türük の民にたいして、武装した敵を、私は馬駈けさせなかつた。馬具をつけた馬を、私は駈けさせなかつた。iltiriš-qaγan が勝たなかつたならば、

(55) （彼に）従つて、私自身が勝たなかつたならば、国家も民も存在しなかつたであろう。彼〔iltiriš-qaγan〕が勝つたために、（彼に）従つて、私自身が勝つたために、

(56) 国家も国家となつた。民も民となつた。私自身は老いた。年とつた。いかなるところでも、そこの qaγan をもつ民が、

(57) 無能者をもつならば、どのような困苦に遭うことだろうか。

(58) türük の bilgä-qaγan の国家に、私が（これを）書かせた。私、賢明な tonyuquq が。

第二碑文北面

(59) iltiriš-qaγan が勝たなかつたならば、彼が存在しなかつたならば、私自身、賢明な tonyuquq が勝たなかつたならば、私が存在しなかつたならば、

(60) qaγan-qaγan と türük〔東突厥?〕-sir〔西突厥?〕の民との土地に、部族も民も人も、まつたく存在しなかつたであろう。(68)

(61) iltiriš-qaγan と賢明な tonyuquqとが勝ったために、qapγan-qaγan と türük〔東突厥?〕-sir〔西突厥?〕の民との来歴はこれ〔以上のごとし〕。

(62) türük の bilgä-qaγan は、türük〔東突厥?〕-sir〔西突厥?〕の民を、oγuz の民を、養いつづけている。まず、Tonyuquq は、Qapγan-qaγan（黙啜）の治世については、自分が昼夜をわかたず可汗のために力を尽したことを、自身が遠征軍を派遣し、警戒を厳にして、勝利を得たことを、また、おのれが天命を得て、Türük〉Türk の民を敵から防衛したことを、要するに、自分自身のたてた功績だけを誇り、Qapγan-qaγan のそれには全然触れていない（第五一行—第五四行）。

つづいて、Tonyuquq は、Iltiriš-qaγan（骨咄禄）と Tonyuquq 自身との得た勝利のみを讃え、誇り、それがあつたればこそ、突厥が独立し、国家を再興し得たこと、もし、Iltiriš-qaγan（骨咄禄）と Tonyuquq 自身とがこの世に生まれず勝利を得なかつたならば、「Qapγan-qaγan と突厥の民との土地に、部族も民も人も、まつたく存在しなかつたであろう」ことを強調している（第五四行末—第五六行初、第五九行—第六〇行）。

要するに、Tonyuquq の言うところによれば、Qapγan-qaγan（黙啜）が生存、統治し得、突厥の民が独立してそれを保持し得、そして、碑文に見えるごとき歴史をもち得たのは、ひとえに Iltiriš-qaγan（骨咄禄）と Tonyuquq 自身との勝利のためであつて（第六一行）、Qapγan-qaγan の功績ではまつたくないのである。これは、前節でしるしたように、Tonyuquq が、Iltiriš-qaγan（骨咄禄）、黙矩（のちの毗伽可汗）一門と密接にむすびつき、したがつて、その一門を抑えておのが直系一族による支配体制の確立を目論んでいた Qapγan-qaγan（黙啜）に快からぬ

感じをいだいていたとすれば、まことに当然といえるであろう。

七

このような、Iltiriš-qaγan（骨咄禄）、默矩（毗伽可汗）一門と Qapγan-qaγan（默啜）一門とのあいだの対立感情は、Köl-tigin, Bilgä-qaγan 両碑文の文章からも察せられる。これらにおいて、Iltiriš-qaγan（骨咄禄）に関しては、

上方で、türük の天（täŋri）、türük の聖なる土地—水は、このように行なつた。「türük の民が無くならぬ〔滅びぬ〕ように」といつて、「民となるように」といつて、我が父 iltiriš-qaγan を、我が母 ilbilgä-qatun を、天は、その脳天をつかんで、上方へ高めたのであつた（IE 10-11, IIE 9-10）。

とあり、これに関連して、Bilgä-qaγan（毗伽可汗）自身の即位についても、

「türük の民の名声が無くならぬように」といつて、我が父 qaγan を、我が母 qatun を高めた天（täŋri）は、国家を与えた天は、「türük の民の名声が無くならぬように」といつて、私自身を、その天は、qaγan（として）即位させたのであつた（IE 25-26, IIE 20-21）。

とか、

天（täŋri）が命じたために、私自身、幸がある〔あつた〕ために、私は qaγan（として）即位した（IS 9, IIN 7）。

とかしるされ、Iltiriš-qaγan, Bilgä-qaγan 両者の即位は、いつに、天（täŋri）と聖なる土地—水の命令、とくに天命によることが強調されている。したがつて、Iltiriš-qaγan（骨咄禄）の戦闘における勝利も、

天（täŋri）が力を与えたために、我が父 qaγan〔iltiriš-qaγan〕の軍隊は狼のようであつたという。その敵は羊のようであつたという（IE 12, IIE 11）。

とのべられているように天が与えた力のおかげであり、また、Bilgä-qaγan が善政を行ない得たのも、

そののち、天（täŋri）が命じたために、我が幸、我が運がある〔あつた〕ために、死ぬはずの民を、私は活かせ養なつた云々（IE 28-29, IIE 23）。

とあるように、天命、およびそれから生ずる Bilgä-qaγan 自身の幸運のためであつた。

ところが、これにたいして、Qapγan-qaγan（黙啜）に関しては、

かれ〔iltiriš-qaγan〕の法の上に、我が叔父が qaγan（として）即位した。我が叔父は qaγan（として）即位して、türük の民を新らしく組織した。新らしく養つた。貧しいものを富裕にした。少ないものを多数にした（IE 16, IIE 14）。

としるされているごとく、その即位においても、その政治にあつても、天命は、まつたくこれに関与しなかつた、つまり、Bilgä-qaγan にとつては、天は、ただ、その父とかれ自身、すなわち、Iltiriš-qaγan（骨咄禄）の直系一族にのみ、命令と力、幸運と援助とを与えるものだつたのである。この Iltiriš-qaγan（骨咄禄）に、顧問、参謀、軍司令官として忠誠を尽し、あまつさえその子供 Bilgä-qaγan の舅であつた Tonyuquq にとつては、その一門を

排除しようとする Qapγan-qaγan（黙啜）は、bilgä（賢明な）、または alp（勇敢な）qaγan ではなく、bögü, bügü（ずるい、狡猾な、悪賢い）qaγan でしかなかったのである。

八

Iltiriš-qaγan（骨咄禄）、黙矩（黙棘連）一門と Qapγan-qaγan（黙啜）一門、この両者間にくすぶっていた対立は、Qapγan-qaγan の戦死にさいして爆発した。通典突厥中は、これについてつぎのように伝えている。

骨咄禄之子闕特勒鳩合旧部、殺黙啜子小可汗及其諸弟并親信略尽、立左賢王黙棘連、是為毗伽可汗。毗伽以開元四年即位、本蕃号為小殺、性仁友、自以得国是闕特勒之功、固譲之、闕特勒不受、遂以為左賢王、専掌兵馬。是時、奚・契丹相率款塞、突騎施蘇禄自立為可汗、突厥部落頗多携弐、乃召黙啜時衙官暾欲谷為謀主。初、黙啜下衙官尽為闕特勒所殺、暾欲谷以女為小殺可敦、遂免死、廃帰部落。及復用、年已七十余、蕃人甚敬服之。[70]

すなわち、Qapγan-qaγan（黙啜）が死ぬと、Iltiriš-qaγan（骨咄禄）の子供 Köl-tigin（闕特勒）は、「旧部」を糾合し、Qapγan-qaγan の子供小可汗ならびにその諸弟・親信をほとんどすべて殺して、自分の兄、右賢王（右廂察、右察、小殺、Tardušad）黙棘連（黙矩）を立て、Bilgä-qaγan（毗伽可汗）としたのである。上に引用した通典（および旧唐書突厥伝上）にいわゆる「旧部」は、新唐書巻二一五上突厥伝上には「故部」と見えるが、これらは、Iltiriš-qaγan（骨咄禄）一門およびそれに従うものたちを指したものであろう。そして、上文に見える小可汗

は、Qapγan-qaγan（默啜）の子供匐俱（拓西可汗、移涅可汗〔Inäl-, Inil-qaγan〕）にほかならない。[71] こうして、匐俱をはじめ、Qapγan-qaγan（默啜）の一門・郎党はほとんど一掃され、[72] これに代つて、Iltiriš-qaγan（骨咄禄）の子供默棘連（默矩）が、弟の Köl-tigin（闕特勒）に擁立されて Bilgä-qaγan（毗伽可汗）となつたのみならず、Köl-tigin が左賢王として軍事権をにぎり、さらに、とくに Iltiriš-qaγan（骨咄禄）に忠誠を尽した、その顧問、参謀、軍司令官で、Bilgä-qaγan の舅にあたる Tonyuquq（暾欲谷）が、かれらの「謀主」として、補佐することになつたのである。この結果、Iltiriš-qaγan（骨咄禄）の直系一族、その党派による支配体制が確立し、そののち、突厥の可汗位は、Bilgä-qaγan の子供たちによつて継承されることになつた。

上に引用した通典そのほかの中国史料は、「默啜（Qapγan-qaγan）に仕えた衙官がすべて闕特勒（Köl-tigin）に殺された」とき、暾欲谷（Tonyuquq）がこれから免れた理由を、かれが小殺（Bilgä-qaγan）の舅であつた点に求め、ジローは、それを、Tonyuquq が Qapγan-qaγan の治世末期に左還されていたことに求めている。[73] すなわち、このさい、われわれは、とくに、Tonyuquq が Iltiriš-qaγan（骨咄禄）、Bilgä-qaγan 一門の党派に属し、Qapγan-qaγan（默啜）一門とは対立する立場にあつたことに注目しておく必要があろう。そして、この事実をしめすものこそ、Tonyuquq が Qapγan-qaγan（默啜）を、bögü-, bügü-qaγan、「ずるい、狡猾な、悪賢い可汗」と呼んでいるそのことにほかならぬ。Tonyuquq が Qapγan-qaγan に与えた bögü, bügü という形容語は、上述のような歴史的事実を一語によつて象徴したものといえる。Tonyuquq 碑文に見える bögü-, bügü-qaγan について考えるのは、たんにこれを誰に比定するかということだけにとどまるものではないのである。

むすび

以上の叙述から得られた結論を列挙するとつぎのごとくである。

(1) Tonyuquq 碑文に見える bögü-, bügü-qaγan を Qapγan-qaγan（黙啜）の子供匐俱に比定する通説は誤りである（第一節）。

(2) Tonyuquq 碑文にあらわれる「我が qaγan」（第三〇行）、「（我が）qaγan」「（我が）qan」（第三三行）は、いわゆる匐俱可汗ではなく、ときの大可汗 Qapγan-qaγan（黙啜）である（第二節）。

(3) 通典突厥中そのほかにいわゆる小可汗、拓西可汗匐俱は、移涅可汗（旧唐書突厥伝上そのほか）、Inäl-, Inil-qaγan（Tonyuquq 碑文第三一行、第四五行）と同一人物である。そして Inäl-, Inil-qaγan とは、西にむかつて「下る可汗」、あるいは、西方へ「侵入する可汗」を意味するのかもしれない（第二節）。

(4) Tonyuquq 碑文に見える bögü-, bügü-qaγan は、Qapγan-qaγan（黙啜）を指す（第三節）。

(5) bögü-, bügü-qaγan とは、「ずるい、狡猾な、悪賢い可汗」などの意味をもつ（第四節）。

(6) Tonyuquq が Qapγan-qaγan を上のように称したのは、直接には、Tonyuquq などの Türgiš 遠征にさいして、Qapγan-qaγan が Tonyuquq にたいしてとつた不信の態度のためである（第四節）。

(7) しかし、そのより根本的な原因は、Qapγan-qaγan が、Tonyuquq が忠誠を捧げた Iltiriš-qaγan（骨咄禄）の直系一族を抑えて、自己の一門による支配体制の確立をはかろうとした点にある（第五節）。

(8) Tonyuquq が Qapγan-qaγan に快からぬ感情をもつていたことは、Tonyuquq 碑文の結語（第五一行—第六二行）からも推察される（第六節）。

(9) Iltiriš-qaγan 一門と Qapγan-qaγan 一門とのあいだに対立感情が存在していたことは、Köl-tigin, Bilgä-qaγan 両碑文からもくみとれる（第七節）。

(10) この対立は、Qapγan-qaγan の戦死後、Iltiriš-qaγan の子供 Köl-tigin（闕特勒）が Qapγan-qaγan の一族・郎党をほとんどすべて殺害し、兄を擁立して Bilgä-qaγan（毗伽可汗）とし、Tonyuquq を「謀主」として用いるにいたつて解消した。この結果、Iltiriš-qaγan 一門による支配体制が確立して、突厥の滅亡までつづいた（第八節）。

(11) すなわち、Tonyuquq が Qapγan-qaγan を bögü-, bügü-qaγan と呼んだことのなかに、Iltiriš-qaγan 一門と、その弟 Qapγan-qaγan 一門とのあいだの対立関係があらわれている（第八節）。（一九六八・一〇・三〇）

（東京大学　教授）

註

(1) たとえば、Malov, S.E.: *Pamyatniki drevnetyurkskoj pis'mennosti, Teksty i issledovaniya*, Moskva-Leningrad, 1951, str. 59.

(2) Malov: ibid., str. 60.

(3) Thomsen, V.: *Turcica, études concernant l'interprétation des inscriptions turques de la Mongolie et de la Sibérie*. Mémoires de la Société Finno-Ougrienne. Helsingfors, 1916, p. 97. ditto.: *Alttürkische Inschriften aus der Mongolei*, ZDMG, LXXVIII, 1924, S. 161, Anm. 1.

(4) たとえば、わが国でも、小野川秀美氏がこの説をとつておられる。小野川秀美「突厥碑文訳註」（『満蒙史論叢第四』　座右宝刊行会、昭和一八年）　三一三頁、三九七頁

—三九八頁、註二二六。

(5) 岑仲勉「突厥文暾欲谷紀功碑」(『突厥集史 下冊』北京、一九五八年) 八七四頁、八七七頁。

(6) GIRAUD, R.: *L'Empire des Turcs Célestes. Les Règnes d'Elterich, Qapghan et Bilgä (680–734)*, Paris, 1960, p. 62. ditto.: *L'Inscription de Baïn Tsokto. Édition critique*, Paris, 1961, pp. 102, 142.

(7) GIRAUD: *L'Inscription de Baïn Tsokto*, p. 102.

(8) ditto.: ibid., p. 114.

(9) KLYAŠTORNYI, S. G.: *Drevnetyurkskie runičeskie pamyatniki kak istočnik po istorii Srednej Azii*, Moskva, 1964, str. 139. GUMILEV, L.N.: *Drevnie Tyurki*, Moskva, 1967, str. 462, 468.

(10) 鎌田重雄博士の還暦を祝う論文集に寄稿したが、これは、未だ刊行されていない。

(11) 以下の翻訳にあたつては、従来の諸説のほかに、ジローの新訳を参照した。GIRAUD: *L'Inscription de Baïn Tsokto*, pp. 55–56, 62–63, 99–103. なお、訳文中で、〔 〕中の語または句はそれに先行する語または句の説明を、( ) は筆者の付した補足を、それぞれしめす。さらに、訳文上の数字は、各行の順番である。

(12) この一句は、マーロフの説のように、彼〔我が qaγan〕の語中にふくまれるものかも知れない。MALOV: op. cit., str. 68.

(13) 原語は sabïγ で「言葉を」をあらわすが、これでは意味をなさない。sab (「言葉」) と記すべきところを、これに先行する二つの sabïγ に惑かれて、誤記、誤刻したものであろう。GIRAUD: op. cit., p. 101.

(14) 中国史料にいわゆる阿波達干にあたる。小野川秀美氏は、この Apa-tarqan は阿史徳元珍の子であろうと言つておられる。小野川秀美、前掲論文、三八六頁—三八七頁、註一六八。これは、阿史徳元珍と Tonyuquq (暾欲谷) とを同一人物と考えるか、別人と見るかの問題にかかわる。わたしは、同一人物説をとるものであるが、これについてはべつの機会にのべたいと思う。

(15) GIRAUD: *L'Empire des Turcs Célestes*, p. 38.

(16) Tonyuquq 碑文に見える諸事件の紀年に関する考証はべつの論文にゆずるが、この問題についてのジローの説には誤りが多い。

(17) 岩佐精一郎「突厥毗伽可汗碑文の紀年」(『岩佐精一郎遺稿』東京、昭和一一年) 一九七頁—二〇一頁。なお、THOMSEN: *Turcica*, p. 93. をも参照されたい。

(18) 旧唐書巻一九四上突厥伝上も同文。新唐書巻二一五上突厥伝上はほぼ同意であるが、左廂察、右廂察を、それぞれ、左察、右

察につくる。

(19) 拙著『古代トルコ民族史研究 I』 山川出版社、昭和四二年、三六頁。

(20) 本稿では、Köl-tigin (闕特勒) 碑文、Bilgä-qaγan (毗伽可汗) 碑文を、それぞれ、I, II と、またそれらの東面、南面、北面を、E,S,N でしめす。数字は各行の順番をあらわす。IIE 15.

(21) 岩佐精一郎、前掲論文、一八三頁。

(22) 前掲拙著、三六頁、五九頁、註七七。

(23) 同上。

(24) GIRAUD: op. cit., pp. 49, 118. GUMILEV: op. cit., str. 300.

(25) THOMSEN: op. cit., pp. 97–98.

(26) KLYAŠTORNYJ: op. cit., str. 139.

(27) 岑仲勉、前掲論文、八七二頁。GIRAUD: op. cit., p. 49. GUMILEV: op. cit., str. 300.

(28) 前掲拙著、三七頁—三八頁。

(29) 通典九巻一六六厳中は、移涅可汗を移沮可汗に、旧唐書〇巻三九郭虔瓘伝は、これを移江可汗に、それぞれ誤り作っている。

(30) 小野川秀美、前掲論文、三三三頁、三九七頁、註二二一。THOMSEN: op. cit., p. 98. KLYAŠTORNYJ: op. cit., str. 37. GUMILEV: op. cit., str. 300, 468.

(31) THOMSEN: op. cit., pp. 97–98. ditto.: *Alttürkische Inschriften aus der Mongolei*, S. 127.

(32) KLYAŠTORNYJ: op. cit., str. 139. なお、グミリヨフも同様に、Inäl-, Inil-qaγan を弟と考えている。GUMILEV: op. cit., str. 300–301.

(33) 岑仲勉、上掲論文、八七三頁—八七四頁。および、岑仲勉『突厥集史 上冊』 北京、一九五八年、三八〇頁。

(34) IIE 31; IN 7.

(35) RADLOFF, W.: *Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte*, Bd. I, St. Petersburg, 1893, S. 1441.

(36) VON GABAIN, A.: *Alttürkische Grammatik. Mit Bibliographie, Lesestücken und Wörterverzeichnis, auch Neutürkisch, 2 verbesserte Auflage*, Leipzig, 1950, S. 309.

(37) マフムード・アルカーシュガリー (Maḥmūd al-Kāšγarī) は、inal, ïnal に、「皇后 (qatun) を母とし、平民を父とする子供」という意味を与えている。しかし、Inäl-, Inil-qaγan の場合、かれが Qapγan-qaγan (默啜) の qatun と平民男子との間に生まれた子供であったとは考え難いであろう。BROCKELMANN, C.: *Mitteltürkischer Wortschatz nach Maḥmud al-Kāšγarīs Dīvān luγāt at-*

Turk, Budapest, 1928, S. 67. ATALAY, B.: *Divanü Lûgat-it-Türk Tercümesi*, I, Ankara, 1939, s. 122. (補註　一九六九年に出版された「古代チュルク語辞典」は、上掲の inal, ïnal を、すでに口蓋化した inäl という形においても掲げ、これに、「qan 家出自の婦人と平民との間の子供」「素性の高貴な人物」という意味を与えている。後者の意味においてなら、Inäl-, Inil-qaγan にあてはまらぬでもない。本稿を草しおわったのちに刊行されたので、補註としてあげておく。NADELYAEV, V. M., NASILOV, D.M., TENIŠEV, E.R., ŠČERBAK, A.M.: *Drevnetyurskij slovar'*, Leningrad, 1969, str. 209.)

(38) BROCKELMANN: op. cit., S. 67. ATALAY: op. cit., I, s. 169. ATALAY: op. cit., II, Ankara, 1940, s. 204. ATALAY: op. cit., III, Ankara, 1941, s. 61.

(39) VON GABAIN: op. cit., S. 311. BANG, W. und VON GABAIN, A.: *Analytischer Index zu den fünf ersten Stücken der türkischen Turfan-Texte*, Berlin, 1931, S. 21.

(40) RADLOFF: op. cit., Bd. I, S. 1439.

(41) RADLOFF: ibid., S. 1439.

(42) RADLOFF: ibid., S. 728.

(43) わたしは、この qan は qaγan と同義に用いられていると考える。

(44) 「チュルク」をあらわすのに、第四六行から türük の文字が用いられている。わたしは、この türük の第二音節の ü が脱落して türk となったもので、鉄勒は türk ではなく türük の音写であると思う。

(45) 岑仲勉、前掲論文、八七七頁。

(46) 前註 (8) 参照。

(47) THOMSEN: *Turcica*, p. 98.

(48) KLYAŠTORNYJ: op. cit., str. 37. primečanie 93.

(49) KLYAŠTORNYJ: ibid., str. 37, primečanie 93.

(50) GIRAUD: *L'Inscription de Baïn Tsokto*, p. 102.

(51) ORKUN, H.N.: *Eski Türk Yazītlarī*, cilt IV, İstanbul, 1941, s. 32.

(52) ATALAY: op. cit., I, s. 428.

(53) ATALAY: ibid., III, s. 228.

(54) ブロッケルマンは、この語を、bükü と写して、「賢明な」と訳し、また、bükü bilgä は、「呪術に通じた」をしめす、という。BROCKELMANN: op. cit., SS. 46, 37.

(55) VON GABAIN: op. cit., S. 306. BANG und VON GABAIN: op. cit., SS. 18, 16.

(56) CAFEROĞLU, A.: *Uygur Sözlü ü*, Ici Bölüm, İstanbul, 1934, s. 36.

(57) RADLOFF: op. cit., Bd. IV, St. Petersburg, 1911, S. 1882.
(58) RADLOFF: ibid., S. 1882.
(59) RADLOFF: ibid., S. 1874.
(60) これについては、すでにジローが、きわめて簡単ながら指摘している。GIRAUD: op. cit., p. 102. ditto.: *L'Empire des Turcs Célestes*, pp. 60-61, 78, 103.
(61) Tonyuquq 碑文第六行、第一碑文西面。
(62) THOMSEN: op. cit., p. 99.
(63) Tonyuquq 碑文第七行、第一碑文西面。
(64) 旧唐書突厥伝上は、ほぼ同文。
(65) 父 Iltiriš-qaγan の歿したとき、默矩は八歳、闕特勒は七歳であつた。IIE 14.
(66) GIRAUD: op. cit., p. 50.
(67) tün udïmatï, küntüz olurmatï などの -tï は、いままでこれらを過去をあらわす語尾の三人称と考え、上掲の二句を、「夜、彼は眠らなかつた。昼、彼は休まなかつた」と訳すのが普通であつた。わたしは、udïmatï, olurmatï の -matï を、否定の Konverbum ととつて、本文のように翻訳し、その主語は、「私」つまり Tonyuquq であると考える。GIRAUD: *L'Inscription de Baïn Tsokto*, pp. 115, 64.
(68) 原語は idi. この語はいままで「主(あるじ)、君主」などと訳されてきたが、わたしは、バザン (BAZIN, L.)、ジローのいうように、これは、否定の意味を強める Partikel であると思う。GIRAUD: op. cit., p. 80.
(69) 前掲拙著、三六頁、五九頁、註七七。
(70) 旧唐書突厥伝上はほぼ同文、新唐書突厥伝上下はほぼ同意。
(71) クリャシトルヌィは、トムセンにしたがつて bögü-qaγan (かれらのいわゆる匐俱可汗) と Inäl-, Inil-qaγan とを別人と見た結果、このとき、Köl-tigin (闕特勒) は、この両人そのほか、Qapγan-qaγan (默啜) 一門・党派に属するものをすべて殺したという。KLYAŠTORNYI: op. cit., str. 38.
(72) このさい Köl-tigin(闕特勒)の迫害を避けて、Qapγan-qaγan (默啜) の子供右賢王墨特勤 (*Bäg-tigin?) が、妹の毗伽公主およびその夫とともに唐に逃れたことは、「唐故三十姓可汗貴女賢力毗伽公主雲中郡夫人阿那氏之墓誌并序」から察せられる。羽田亨「唐故三十姓可汗貴女阿那氏之墓誌」(『羽田博士史学論文集 下巻 言語・宗教篇』京都大学文学部内東洋史研究会、昭和三三年) 三六五頁—三八四頁。
(73) GIRAUD: *L'Empire des Turcs Célestes*, p. 61.

Tonyuquq 碑文に見える bögü-, bügü-qaγan について